

「境界域」の人々の祭り

——厳原港祭りと対馬アートファンタジア——

田 中 景

はじめに

20世紀以降の近代化とそれに続くグローバル化による交通、流通、通信手段の発達によって、今日、人、モノ、情報が国境や国家の枠組みを越えて世界規模的に往来する時代となった。政治共同体レベルにおいては、各国の政治、経済、文化など様々な領域が、もはや一国のみで自立して成立することはなく、いわゆる覇権的な「先進国」の主導のもと、国連、EU、経済連携協定、多国籍企業、国際支援団体などの国際的な連携や協力により展開している。また個人レベルにおいても、生産、消費を含めた生活を形成するあらゆる領域が、ますます個人の帰属する国家、国民、民族、その他の分類の枠に縛られることなく成立している。個人の海外における就労、就学、観光はますます容易になったばかりでなく、そうした個人の文化の越境とも言うべき経験は、インターネットの普及によって物理的に国境を超えずとも可能になった。

このような、超近代としてのグローバル化の結果、特に政治共同体レベルにおいては様々な制度の国際規格化、個人レベルにおいては生活様式全般に及ぶ文化の画一化がますます進行している。そのことは、グローバル化を主導する覇権的な「先進国」の制度や文化が世界のスタンダードとして普及することのみならず、多様な個人、および共同体が共通の利害や諸問題を抱えつつ共存せざるを得ないことを意味する。またグローバル化は、多様な文化の流通、商品化、消費を促進するため、あらゆる地域や民族に固有ないしは典型的と見なされる文化を世界に普及させる。多様な文化を相対的に尊重する多文化主義が世界的に常識とされる中で、個人はそれらの異なる文化を生活の中に取り込み、消費し、やがて自らの文化の一部としていく。その結果、個人にとって国民や民族といった概念はアイデンティティを支える絶対的な基盤ではなくなっていき、地球市民という考え方が主流になっている。その一方で、文化の画一化に対する反動から、自らのアイデンティティを自らが帰属する集団とそれに固有ないしは典型的とされる文化に求める動向も生じ、さらにそのことは、しばしば

「境界域」の人々の祭り

多様な文化の流入と受容に対する反発をも招いている。言い換えれば、グローバル化の進展はローカリズムを、流動的あるいは融合的な多文化主義の促進は、集団内部の個性を排除した一元的な固有文化中心主義を、それぞれ発達させる。

すなわち、今日のグローバル化の中で、共同体や個人は、国家や国民、民族といった従来自明のものとしてされてきた帰属集団の枠組みに制度的にも観念的にも自由になりつつ、個としての文化を確立し、存続していくことが要請されている。本稿では、このようなグローバル化時代における文化構築の実践の現状を提示したい。具体的には、長崎県対馬において行われてきた、行政主導の「厳原港祭り」と民間主導の「対馬アートファンタジア」の、朝鮮通信使に関連した二つの祭りを比較する。対馬は朝鮮半島と九州の間に位置する島で、地政学的にも歴史的にも常に日韓の狭間で存立してきたグレーゾーンであり、そこに住む人々も多くが近代以前から超国家的に活動していた。また、「対馬アートファンタジア」の企画運営に携わったのは東京在住の済州島系コリアンの人々であり、戦前からの日本の植民地支配により国家を奪われた人々の子孫として、彼らもまた国家や国民の枠組みに帰属しない狭間を生きる人々として位置付けられる。すでに近代以前から超国家的であることを存続の前提とする対馬において、集団の帰属が明確でない人々が二つの祭りを通してどのような文化をどのように構築しようとしているのか、比較しつつ提示したい。

1. 「超」国家的な場としての対馬

対馬は、九州と朝鮮半島の間の中シナ海に横たわる島嶼で、行政区分上は長崎県に属するが、距離としては福岡に近く約 100 キロメートルの距離である。ところが、対馬と韓国の釜山との距離はわずか 50 キロメートルで、したがって地理上対馬は日本よりも韓国に近い。対馬の地形は、浅茅湾を挟んで朝鮮半島南部方向に伸びる上対馬と九州方面に伸びる下対馬からなり、全島内陸部は山に覆われ農耕地に乏しい。対馬は厳原町、美津島町、豊玉町、峰町、上県町、上対馬の六町からなるが、2004 年の市町村合併により対馬市の一市体制となった。市の中心は対馬府中と呼ばれたかつての城下町、厳原で、市役所や商工会議所、ショッピングセンター、対馬藩ゆかりの主要な観光名所、宿泊施設、飲食店が集中している。対馬は過疎化の一途にあり、人口は 2014 年 8 月現在で 33,097 人、そのうちの 12,142 人が厳原町に住んでいる。

上対馬は北東先端部に比田勝港があり、そこから国道が内陸部を西寄りに南へ上対馬町、上県町、峰町、豊玉町へと敷かれ、浅茅湾を東側に回って対馬空港、そして厳原へと続く。また、上対馬の東沿いや東西を横切って県道が走っている。島を取り囲む海岸の至るところが豊かな漁場で、漁期に応じてタイやアジ、イサキをはじめ様々な種類の魚やイカ、鮑やサザエ、ワカメの漁が行われるが、特に上対馬では海や浜辺に漁船が並び、周辺にワカメやイ

カを干した漁村の集落のある風景が特徴的である。一方、下対馬は、美津島町、巖原町、南端の豆殿へと南下するほどに内陸部は山々が険しく、幹線道路は美津島町から巖原町をエス字に横切って東回りに海岸線を南下する県道のみである。険しい山々を擁する地域ではあるが、下対馬には山間部に陸稲や段々畑、蜜柑などの果樹栽培が行われている。このように海に囲まれ、山に覆われていることから、対馬の島民の大半は古くから漁業に従事し、また主食である米や穀物を自給するのが困難であった。島内の開発は遅れがちで、1953年から政府の経済開発援助が実施され、1960年代後半以降になって島内の交通体系やインフラの整備が進められた。このことは逆に島内の豊かな自然が手つかずのまま保たれている現状につながっている。

上記のような地理上の位置から、対馬と朝鮮半島、東シナ海海域、中国大陸の間には常に人の往来が頻繁であった。そのため古代から日本の中央政府は、対馬をその政権の及ぶ「辺境」であり、国防の最前線の地としてきた。例えば、7世紀には大和朝廷が唐や新羅の来襲に備えるために金田城を築城して防人を配し、また13世紀に起こったいわゆる元寇では、対馬は鎌倉幕府軍と蒙古・高麗軍の激戦地となった。明治以降は要塞地帯となり、1950年代には李晩承大統領が対馬・壱岐の割譲を要求し、緊張状態にあった。今日、対馬には陸上・海上・航空自衛隊が駐屯し、「国境の島」としての地政学上の役割は変ることなく続いている。

対馬と東シナ海海域の人の往来は、対馬が耕作地に乏しく食糧の自給自足が困難で、島民は漁業や私貿易を生業とする土地柄であることにも由来していた。14世紀には朝鮮半島で米と人の略奪を行う「倭寇」が暗躍していたが、その多くを占めていたのが対馬島民であった。当時の対馬の支配者宗氏は、九州北部において領地獲得のため戦闘に参加していたため、島内勢力の統制には力が及んでいなかった。一方15世紀に入り朝鮮半島では、朝鮮王朝政府が「倭寇」対策として宗氏に倭人統制を要請し、それと引き換えに朝鮮との交易権を保障する政策を打ち出してきた。宗氏はこれを積極的に受け入れ、朝鮮政府に協力して島内支配を進め、倭人通交人統制制度を確立した。これに合わせて現在の朝鮮半島の鎮海、釜山、蔚山に浦所と倭館が設置され、日本からは銅や錫、鉛、銀が輸出され、朝鮮側は木綿の布でその代価を支払った。同時期に宗氏は九州北部の戦闘を経て福岡を獲得し、対馬、朝鮮、福岡を繋ぐ貿易ルートの確立に政策の重点を移行した。まとめるならば、対馬の島民の多くは政治権力の秩序に服することなく、「国境」とらわれずに、活路を求めて東シナ海海域を移動しながら活動していたこと、他方、対馬の権力者もまた、島内秩序の確立の背景として経済的権の掌握をめぐる状況を見ながら九州と朝鮮半島の間を行き来していたと言える。

対馬宗氏の朝鮮との交易は、宗氏が豊臣秀吉政権に組み込まれ、秀吉の朝鮮出兵（文禄・慶長の役）に従ったことで途絶えたが、徳川政権の成立後再開した。徳川幕府にとって中央政府としての権威を国内外に知らしめるためには朝鮮との外交・交易は重要であり、また明との関係を修復して貿易を再開したいとの目論みがあった。朝鮮王朝政府は明軍の駐屯が長

「境界域」の人々の祭り

引くことによる財政疲弊よりも、むしろ日朝関係を再開することに利があると考えた。結局、最も状況のわかる位置にいるのは対馬宗氏であるとの認識のもと、徳川幕府と朝鮮政府は宗氏を通して交渉を行い、1607年に正式な朝鮮使節団が来日し、江戸と駿府でそれぞれ徳川秀忠、家康と会見した。朝鮮出兵を期に疲弊の一途にあり朝鮮との貿易再開を求めている対馬藩にとって、交渉を成功させて日朝関係を成立させることは死活問題であった。そのため、対馬宗氏は、徳川幕府に対しては朝鮮に比肩する権威を、朝鮮王朝政府に対しては華夷思想の秩序をそれぞれ日朝関係成立の前提とするという、双方の認識や面子を考慮し、秘かに両者の間で交わされた書簡の偽造まで行っている。以後、朝鮮王朝政府は徳川家の慶事の折に通信使を遣わした。一行は漢陽（現在のソウル）を出発し、釜山を經由して対馬に寄港し、海路と陸路を利用して江戸に向かった。その際、対馬藩は通信使の招聘、接待、随行、通訳を務めた。

このように中央集権体制に組み込まれ、使節招聘交渉に成功した対馬藩は、江戸幕府より外交の役割を委任され、幕府と朝鮮との交渉役を務めることになった。併せて、その役目を果たすための特権として、朝鮮との通交貿易の権益を得た。すなわち、対馬藩は日本側唯一の通交者として釜山に草梁倭館を建設して対馬藩士および商人を滞在させ、主に日本の銅や錫、銀や蘇木と朝鮮の木綿や朝鮮人参、米を輸出入し藩財政を潤した。また倭館では、幕府の命を受ける形で対馬から派遣された通信使が朝鮮王朝政府の特使に拝謁する儀式も行われた。江戸幕府の朝鮮との外交とは通信使の招聘および派遣の他、双方の漂流民送還、倭館の移転や犯罪者の処分をめぐる交渉や約条の改訂などであったが、それら交渉は対馬と朝鮮の間で行われた。対馬藩は両者の認識や主張が相違することがしばしばある中で両者の間でうまく立ち回り、日朝関係の安定のために不可欠な存在となった。対馬藩は江戸幕府より外交を委任されてはいたが、他方で日朝貿易の利益に関わっていることから朝鮮王朝政府に対しては朝貢的な儀礼を行っていた。

対馬藩による日朝外交および通交は、17世紀後半の三代目藩主宗義真の治世のときに最盛期を迎え、その後江戸時代後期から幕末に進むにつれて下降線をたどった。それでも対馬藩の財政は朝鮮との貿易に支えられていた。藩財政窮乏の折には、日朝外交および通交の役目を幕府に委任されている立場を利用して幕府補助金を請願し、通信使実施に関わる補助や貿易不振に対する補助の名目で幕府より金銭や米の補助を幾度となく獲得している。結局、対馬による日朝外交および通交の実務の任は明治政府樹立まで続いた。1868年、対馬藩は朝鮮政府に王政復古と新政府樹立を告げる文書を送ると朝鮮政府はこれを拒絶した。朝鮮王朝にとって日朝外交や対馬との通交は、清を頂点とする華夷思想の秩序の上に成立していたのであり、文書は対馬を含む日本がその秩序から独立することを意味していた。

今日、朝鮮通信使を軸とする日韓外交・交易の歴史は対馬市の観光の要として押し出され、新たな韓国からの人の往来を促進している。島の至るところに通信使の上陸や逗留を記念す

る記念碑が整備され、夏の厳原港祭りでは朝鮮通信使行列を再現し、韓国からの観光客を対馬に引き付けている。さらに東日本大震災と原発事故の影響から、手軽に訪れることのできる対馬の人気は高まった。今日、韓国人旅行者の年間来訪者数は地震前の最大7万人から18万人にまで増加した。釜山と厳原、比田勝を結ぶ航路はJR九州ほか、韓国の会社2社がフェリーを就航しており、価格競争から5,000円ほどで韓国と対馬の間を往復することができる。その結果、毎日平均300人から400人の観光客が韓国から島を訪れている現状である。

このような対馬の「表の歴史」の一方で、対馬と朝鮮、あるいは対馬を介した朝鮮と日本との間の人の往来という現象がもう一つあったことに言及しなければならない。すなわち、近代以降の日本による朝鮮の植民地支配によって本格化した朝鮮から日本への出稼ぎ労働者の流入である。この文脈において、対馬に流入したのは主に済州島からの漁民や海女たちであった。次いで、慶尚南道など朝鮮半島南部からの出稼ぎ移民もあり、下対馬で炭焼き労働者となった。特に、朝鮮半島の南方の東シナ海に浮かぶ済州島は火山に覆われて耕作地に乏しく、古くは耽羅国として島民の多くは漁業と海洋貿易を生業とし、後に朝鮮王朝の秩序の中に朝鮮の「辺境」あるいは「内なる植民地」として位置付けられた。すなわち、地政学的に見て済州島は対馬と類似していた。しかし、20世紀に入り日韓併合後は、済州島は植民地「朝鮮」の一部とされ、島民は一括して「朝鮮人」とされた。朝鮮の植民地化の結果、主に九州から漁民、潜水器業者、水産加工業者が済州島に渡り、漁業と水産業を独占した。済州島民は朝鮮総督府の管理のもとに操業の自由を失い、日本人水産業者の低廉な労働力となった。その結果、島民は日本市場向けのより商品価値の高い漁獲物を求めて朝鮮半島や日本各地に出稼ぎに出るようになった。特に対馬は済州島から近い距離にあり、豊かな漁場があるために多くの済州島民が渡ったのである。

戦後、多くの朝鮮系住民が朝鮮に帰郷したが、1948年の済州島四・三事件や朝鮮戦争の勃発から、生き延びるためにさらに大勢の済州島民が対馬に逃れて来た。1950年代、対馬に住む朝鮮系住民は済州島および朝鮮半島出身者を含め6,000人にのぼった。済州島民は漁獲物の漁期に応じて島の至るところへ出かけて行き、女性は海女として潜水器をかついで100メートルもの深さまで潜りアワビやサザエ、ウニ、ワカメを獲るコンプレッサー漁に従事し、男性は主に海女の船頭を務めるか、あるいはイカ漁に就いた。やがて、男性の従事するイカ漁の不漁、海女たちの日本人漁業者との軋轢、さらに子どもの教育や就職などの理由から、済州島民は対馬を離れ、大阪や下関などの都市に移り住み、朝鮮系コミュニティに参入し、いわゆる在日コリアンとして一元的な枠組みに括られていく。その結果、20世紀末には対馬に住む海女はわずか6人にまで減少した。海女たちの多くは日本本土に移住した後も漁期に応じて季節労働者として対馬に出稼ぎに出かけ、さらに対馬と釜山の間をいわゆる密航で行き来し、行商を行った。これら済州島および朝鮮半島から対馬へ渡った人々の往来

「境界域」の人々の祭り

は、対馬の歴史の一部として記述され、あるいは語られることに乏しく、実際に生活圏を共有した島民の記憶に残るのみである。

以上、対馬における政治経済、および社会的関係性がどのように構築されてきたのか、概観してきた。まず対馬は、その地理的条件から政治共同体レベルでは、日本の辺境ないしは国防の最前線として位置付けられてきた。そのことは対馬が古代から大陸や半島勢力に対する日本の防衛の拠点とされてきたことに留まらない。近世の朝鮮政府の「倭寇」政策の事例が示す通り、対馬は朝鮮政府の要請を受けて日本人の渡航・通交の管理体制を敷いたのであり、その意味において対馬は朝鮮政府にとっても防衛の拠点であった。また、食糧の自給自足が困難なことから、朝鮮との通交が対馬の支配者と島民の活路であり、そのために日朝間の緩衝材として双方の中央政府が前提とする秩序に同調・同化する必要があった。特に朝鮮通信使外交と「倭館」交易を成立させるため、徳川幕府と朝鮮王朝政府のそれぞれの忠臣となった。日朝の狭間であって、どちらも良好な関係を維持すること、二つの国家の辺境でありながら、国家を結ぶ中核であることが、対馬独自の特性であると言える。

また、対馬と朝鮮の間の人々の移動は、通信使の往来や「倭館」交易という公的レベルだけでなく、個人レベルにおいても常に頻繁にあった。前述の「倭寇」の事例や済州島および朝鮮半島からの日本の植民地主義下における出稼ぎや戦後の政治経済的混乱による人々の流入の事例が示す通りである。もちろん、地理的環境や歴史的状況の圧力が移民創出の背景にあることは否定できない。それでもやはり、国家や中央政府の秩序の枠組みを越えて自立的に活動する人々が時代を通して対馬には多く存在したと言える。植民地時代の済州島民は対馬に渡った理由として、対馬が済州島から距離が近く、豊かな漁場があるからだけでなく、済州島と似通った島である点を挙げている。対馬を済州島同様に「辺境」の島と捉える見方は、そこに行けば政府管理体制からある程度自由になれることを想定していたと考えられる。また、「倭寇」や戦後の済州島出身者の存在は、対馬が国家秩序から外れた人々や国家に帰属しない人々をかくまう一種の避難所として彼らの越境的で無法的とも言える経済活動を受容してきたことが指摘される。以上の点から対馬とは、政治共同体レベルでは国家の体制や秩序が「極まる」という意味において、個人レベルでは国家の枠組みを「超越する」という意味において、まさに「超」国家的な場であると言える。

2. 巖原港祭り

巖原港祭りは、1964年に巖原町商工会と巖原町観光協会の共催で巖原港祭りとして初めて行われた。早くから朝鮮通信使行列を模した仮装行列が行われていたが、1980年から本格的な行列再現が始まり、1988年に祭りの名称が「巖原港アリラン祭り」と併記されるようになった。祭りの運営はもともと巖原の商店主やその子弟たちが中核となり、そこへ行政

や各種団体が協力する形で発展してきた。2004年の市町村合併後は対馬市観光物産推進本部、商工会議所青年会による厳原港祭り振興会、朝鮮通信行列振興会が祭りを主催し、厳原港・東浜埠頭を主な会場として開催される。通信使行列の正副使役は釜山市から招き、それ以外の役者は自衛隊や九州連合会、銀行など団体の職員が構成する。その他、子ども神輿、夕刻からの舞台「演芸の夕べ」では対馬の民間団体や釜山市からの歌舞団による出し物が披露される。2012年の竹島領有問題や2013年の対馬観音寺所蔵の仏像盗難事件から日韓関係が悪化したことを受けて、祭りの名称から「アリラン」が削除され、朝鮮通信使行列は中止された。しかし、厳原港祭りの最大のイベントであることから通信使行列は今後も継続される。

厳原港祭りが地方の小さな祭りから朝鮮通信使行列を中核に日韓交流事業として国内外に知られるまでに発達したのは、厳原の衣料品店主の庄野晃三郎氏が1980年3月に当時大阪在住の辛基秀氏が製作した記録映画『江戸時代の朝鮮通信使』を見たことをきっかけとする。映画を通して対馬に朝鮮通信使という平和な時代の日韓交流があったことに感銘を受け、対馬の独自の特色としてこれに着目した庄野氏は、釜山に渡って韓服等衣装や装飾品を購入し、同年8月の厳原港祭りから通信使行列を始めた。また、その時に商工会議所に朝鮮通信使行列振興会が発足し、庄野氏は会長に就任した。その後、朝鮮通信行列振興会は厳原町からの補助金を得て、現存する18世紀の通信使絵巻から時代考証を経て韓国KBSに出入りするソウルの衣装専門店に衣装の仕立てを頼み、本格的な通信使行列の再現が始まった。

1988年には、厳原港祭りは長崎県からの補助金を得て、特色ある地方の祭りとして内外の認知度を高めた。同年、長崎で「旅博」が開催された折、県行政は壱岐、対馬、五島の地域イベントにも予算を組むことを決定した際、厳原町は対馬全島をあげて歴史を再現し、異国情緒の味わえるイベントとして厳原港祭りに補助金を申請し獲得したのである。この時、県行政からの指導もあり、祭りを周囲にわかりやすく注目を引くものにする目的から、名称を「厳原港アリラン祭り」に変えた。しかしながら、名称変更は日本本土からの観光客の増加には繋がらなかった。対馬が本土から遠く離れているために旅費が嵩むこと、また朝鮮通信使行列にゆかりのある日本各地の市町で対馬と同様のイベントが次々に行われるようになったためである。

その後、厳原町は対馬の外に向けて朝鮮通信使行列の取り組みを発信し、国内外の行政団体と共同で活動するようになった。まず、朝鮮通信使の通った日本の市町村を足跡と呼びかけ、1995年に朝鮮通信使縁地連絡協議会（これ以降、縁地連と表記）を発足して対州運輸株式会社社長の松原一征氏が会長に就任した。縁地連は、朝鮮通信使関連のイベントを参加市町村と共同で開催し、さらに松原氏は釜山市に朝鮮通信使行列の再現を提案した。もともと韓国では朝鮮通信使は埋もれた史実であり、この呼びかけに対しても釜山市は当初全く興味を示さなかった。その一方、釜山市の一部の歴史研究者や仏像美術研究者が対馬で朝鮮通信使行列が再現されていることに注目し、祭りの主催者と交流を深めていった。こう

「境界域」の人々の祭り

した機運から、釜山市でも通信使行列を市のイベントである「海祭り」の中で再現することになり、釜山市外郭団体の釜山文化財団が厳原港アリラン祭りにおける朝鮮通信使行列再現の取り組みを学ぶために職員を3年間ほど対馬に派遣した。今日、釜山市では朝鮮通信使行列は単独のイベントとして行われている。

両市の交流の結果、2002年から対馬市と釜山市が協賛で朝鮮通信使行列を実施するようになった。毎年8月の厳原港祭りでは、釜山から厳原へ通信使行列の正副使役と通信使の前を歩く「吹歌隊」役が派遣され、5月に釜山で開催される朝鮮通信使行列には対馬から10名から20名の武士団役が派遣される。加えて釜山文化財団は舞踊団や伝統芸能団を派遣し、「扇の舞」や「農楽」など、いわゆる韓国の典型的な伝統舞踊や音楽を披露している。対馬市は釜山市から行政長や学術関係者を招いて晩餐会を開き、そこで対馬と朝鮮の交流史や日韓の友好関係が確認される。財政面についても、相手側から派遣される人員や来賓の宿泊費など入国後にかかる経費は受け入れ側が負担する仕組みになっている。さらに、朝鮮通信使行列が両市の協賛事業となった結果、現在、両市が連携して朝鮮通信使を世界記憶遺産に登録するために活動している。

このように、日韓交流を主軸とした観光促進は、対馬市の主要な取り組みとなっていった。対馬の三大祭りとされる厳原港祭りとその後続の企画の「国境マラソン」、「ちんぐ音楽祭」は、いずれも日韓交流事業である。しかし、やはり厳原港祭りが最大の呼び物で、とりわけ釜山文化財団との連携から朝鮮通信使の歴史が韓国の人々にも認知された結果、朝鮮通信使行列見物に韓国から対馬への観光客が徐々に増加した。毎年祭りの平均参加者数は2日間で延べ2万人を数え、その多くが韓国からの観光客であるとされている。厳原の代表的なホテルは釜山市からの来賓客の宿泊用に行政が押さえ、それ以外の韓国の旅行会社と提携しているホテルは韓国人観光客でほぼ埋まるため、宿泊を必要とする日本本土からの観光客は少ない。また、祭り見物に来る島民は交通手段の関係上、厳原とその近隣の住民が主であると思われる。

そのような現状の中で、2013年に対馬の観音寺における仏像盗難事件は厳原港アリラン祭りの実施に影響を及ぼした。韓国の裁判所で仏像を観音寺に返還しなくてもよいとの判決が出た結果、日韓関係はさらに冷え込み、右翼を中心に日本全国から厳原港アリラン祭り開催に対する抗議が市行政や商工会議所に殺到した。祭り主催者側は、対馬が地理的にも歴史的にも韓国と近隣の間柄にあり、韓国との友好関係なしには立ち行かない場所であると認識し、また、歴史を通して対馬は日本のどこよりも日韓外交・交易に携わってきたという自負があった。よって、対馬は教科書問題、従軍慰安婦問題、竹島領有問題など、これまで両国間に様々な問題が生じた際にはそれらには一切触れず釜山市との交流事業を行ってきた。主催者は対馬の交流事業を国家間関係にとらわれない「民際交流」と説明し、また江戸時代に草梁倭館で外交実務に携わった雨森芳洲の「善隣外交」を今日の対馬の日韓交流の礎

としている。そして仏像盗難事件は、対等な友好関係を第一義としてひたすらに交流事業に打ち込んできた対馬に対する侮辱として受け止めた。結果、主催者側は「対馬の人としての誇り」の決断として、祭りの名称から「アリラン」を削除し、その年の朝鮮通信使行列を中止することに決定した。対馬側と連携してきた釜山市文化財団担当者などは仏像盗難事件に関して対馬に同情的であり、また名称に「アリラン」を残してほしいとの意向を伝えてきたが、対馬側は決断を曲げなかった。

対馬市観光物産推進本部および商工会議所青年会は、厳原港祭り50周年を節目に対馬の交流事業をさらに発展させていくことを考えている。一つは釜山市との連携を軸とする日韓交流の継続と発展である。2014年の祭りでは通信使行列は復活の予定であったが台風の影響で中止となり、国書交換式のみが行われた。この時、正使役として招聘された釜山市行政文化委員会委員長と対馬守役を務めた対馬市議会議長が国書を交換し、日韓の友好関係の構築と朝鮮通信使のユネスコ世界記憶遺産登録への協同を確認した。二つ目は韓国との交流の次世代への継承で、厳原港祭りでの子ども通信使行列の実施を考案中である。三つ目は東アジア圏交流への拡大で、江戸時代の日韓交易が間接的に明および清との交易でもあった史実から、対馬市は釜山市との連携にとどまらず、新たに上海の崇明島と姉妹締結を結んでいる。この点からすると、祭りの名称変更は釜山市ないし韓国に交流相手は留まらないという対馬市の今後の方針に合致しているとも言える。

3. 対馬アートファンタジア

対馬アートファンタジアは、東京の文化「講」ギンザ柳々舎の企画による現代芸術の祭典である。柳々舎が企画を対馬市長に提案して賛同を得た後、対馬市が予算を組み、柳々舎に事業を委託して2011年から2013年にわたり実施された。参加する芸術家の派遣や活動資金の補助の面で、特に広島市立大学芸術学部と釜山市文化財団の協力が大きく、三者の連携によって事業が動いたと言ってよい。日本と韓国、ヨーロッパ、南北アメリカより現代芸術家たちが対馬に集まり、アーティスト・イン・レジデンスの形態を取りながら作品の制作・展示を行った。作品のテーマも使用された材料も個々に様々で、自然やその場にある建造物など対馬の景観が展示の場として使われた。

ギンザ柳々舎は、東京画廊経営者の山本豊津氏、陶芸教室イーヨー主催者の梁順喜氏、そして建築家の夫学柱氏が現代文化を親しむ「講」として2009年に発足させた。山本氏の父であり先代の画廊経営者は、70年代より韓国の現代美術を多く日本に紹介し、また古美術商ということもあって朝鮮文化に造詣が深かった。その影響から山本氏は幼少時から日本、中国、朝鮮の美術工芸品に触れ、三者の間の文化交流の歴史を体感するとともに、とりわけ朝鮮半島の文化については「質感が合う」と感じてきた。ギンザ柳々舎の活動は、そのよう

「境界域」の人々の祭り

な個人の経歴や人生といった、いわば個人史において育まれた「質感」が合う者同士が集うことによる、国家の枠を超えた文化の交流を基盤としている。よって、ギンザ柳々舎は個人の作家の個人的な参加を前提としており、作家の展示やパフォーマンスの場も美術館ではなく個人の屋敷などを借りて行う。

対馬アートファンタジアは、建築家の夫氏が草梁倭館の建築を研究しており、朝鮮通信使の歴史に詳しいことから構想された。夫氏を通して山本氏と梁氏は、朝鮮通信使を含めた江戸時代の日韓交易によって両者の間に平和的な交流が存在した史実に感銘を受け、21世紀の「朝鮮通信使」を芸術で対馬に再現する発想に至った。同様の現代芸術の祭典は、地域興しの一環としてすでに日本各地の市町村で行われており、例えば民間企業のバックアップで始まった瀬戸内海の直島のアートイベントは、今日多くの観光客を引き付けることに成功している。ギンザ柳々舎も対馬アートファンタジアの企画を過疎化と高齢化の一途にある対馬市への新しい観光のスタイルとして市長に提案した。

企画は、あらゆる面で従来の近代芸術の型を超越ないしは脱するものであった。個人が何度でもその場を訪れ、芸術を介して他者と繋がり、交流する、現代の巡礼のシステムを創る意味から、企画の名称を「ファンタジア」とした。対馬が手つかずの自然を擁し、国家・国境の枠組みに縛られず朝鮮半島との間を往来する人々が常に存在したことは、脱近代的な巡礼の場として相応しかった。作品の展示もまた、無機質で画一的な美術館に陳列するという近代的な作法に則るのではなく、作家が自由な発想のもとに創作し、そこにある景観の中に作品を展示する。参加する芸術家たちも企画者の個人的な繋がりや人脈を通して推薦された作家がほとんどで、出身も日本と韓国に留まらない。山本氏は旧来の友人である広島市立大学芸術学部教授の伊藤敏光氏に作家の推薦を依頼し、広島在住の芸術家たちが参加することになった。ヨーロッパやアメリカ、メキシコからの作家も山本氏や伊藤氏の知り合いであった。韓国からの芸術家については、釜山市文化財団が作家たちを推薦し、柳々舎が選考した。同財団は朝鮮通信使の歴史を釜山市の観光イベントに活用する趣旨から「新・朝鮮通信使」という事業を立ち上げ、対馬をはじめ日本各地の活動を視察していた。その動きの中で、横浜など朝鮮通信使を現代芸術に解釈を拡げて活動し始めていることを知り、韓国の現代芸術家を日本の朝鮮通信使にゆかりのある場所に派遣するための予算を組んだ。そのことから、夫氏が同財団に対馬アートファンタジアに参加する作家の派遣を依頼したのであった。

ギンザ柳々舎は対馬市から対馬アートファンタジアを完全に委託されていたため、事業一年目の2011年はイベントを実際に立ち上げるためのシステムを一から確立しなければならなかった。そのため、参加する芸術家たちの衣食住の手配、作品の制作のために必要な材料や道具の手配、作品を展示する場所の借用許可、オープニングイベントの実施、イベントの広報や宣伝など、アートファンタジアを実践するための環境や関連する活動の全てを企画者側が手作りで整えた。山本氏たちは対馬島内を回って住民にアートファンタジアについて直

接説明し、協力を依頼し、ボランティアを募った。また、アートファンタジア開催期間の11月5日から12月11日の間、柳々舎はイベントを盛り上げるため東京からアートファンタジア巡りのツアーを実施した。対馬島民もアートファンタジアの実施に協力を惜しまなかった。例えば、オープニングセレモニーに東京から朝鮮半島の楽器ピリの演奏家、崔栄徳氏を招いた時には、対馬宗家の菩提寺の万松院が、同時期に境内で催す地元の住民で賑わう「万松院祭り」の場でピリ演奏会をやることを提案してくれた。そのほか、住居や自動車の無料貸与、制作のための物品の提供、展示会場の留守番など、様々な形で一般住民の人々が協力してくれた。このように、イベント実施のための「インフラ」を整備しなければならない状況にありながらも、ギンザ柳々舎の人的な繋がりや対馬島民の協力に支えられ、一年目は好感触を得たと梁氏は振り返っている。

翌年2012年には、アートファンタジア開催宣言のイベントとして、ギンザ柳々舎は2011年の活動の報告会とシンポジウムを8月に東京画廊で開いた。また、11月には作家たちが対馬の人々に現代芸術を体験してもらうためのワークショップを企画し、地元の高校生や児童センターの子どもたちを対象に開催した。前年に引き続き、作品の制作と展示も順調に進んだ。作家たちは、石や老木、蔓の枝、藁、金属板、将棋の駒、プラスチック、フェルト、消波ブロック、ブイ、消しゴムの削りかす、朝鮮半島から漂着したゴミなどの様々な素材を利用して、自然・動植物、抽象概念、歴史的事象、現代社会の諸問題、作家個人の観念などの様々なテーマを作品に表した。そして、巖原、木坂、比田勝の対馬島内の3か所において、寺社の境内、民家の一室、対馬市役所を含めた公共施設内、対馬市交流センターの敷地、藻小屋や半井透水館といった史跡、海水浴場など様々な場所を展示会場に新たな芸術的景観を作り出した。

こうして事業が盛り上がりつつあった最中、2013年に観音寺所蔵の仏像盗難事件が生じ、一転して参加者の中で事業遂行について不安が広がった。まず、それまで作家たちに宿泊所と作品の展示の場を提供してきた西山寺がアートファンタジアへの協力を打ち切ることを決定した。西山寺は江戸時代には以酌庵として対馬藩の朝鮮交易の実務を支えた寺社で、いわば古くから対馬藩の日韓交流を実践してきた。現代においては、宿坊を経営して韓国からの観光客や滞在客の逗留を引き受けるなど、長い間交流に携わってきた。また仏像が盗まれた観音寺は西山寺の分家とも言うべき寺社で、西山寺の管理下にあった。そのような背景や立場にあって西山寺前住職は、仏像の返還責任はないとする韓国側の主張に憤慨の意を示し、以後、アートファンタジアを含めた公式の日韓交流事業には関与しないと宣言した。さらに、オープニングセレモニーに在日コリアン3世で金剛山歌舞団専属の崔栄徳氏がピリの演奏することについて外部から抗議があった。2013年のオープニングセレモニーに対馬生まれの韓国伝統舞踊家、趙寿玉氏が舞う予定であったが、予算縮小から実現せず、結局、崔氏によるピリ演奏が万松院で行われた。さらに韓国人作家による作品の展示は、対馬市行政の要請

「境界域」の人々の祭り

のもと安全性を考慮して厳原にまとめることにした。企画者側の不安をよそに、仏像盗難事件が引き金となって、アートファンタジアの活動そのものを妨げるような事態は起こらず、8月のワークショップ、10月のオープニングセレモニー、そして作品の創作・展覧を含めた2013年のイベントは無事に行われた。

3年間の成果としての対馬アートファンタジアの集客効果は小さなものであった。参加者は毎年100人から200人で、そのほとんどは対馬の住民であった。この数は厳原港祭りの参加者の100分の1に相当する。日本本土からの対馬までの距離が遠く、旅費が高いために、全国的によく知られていない現代芸術の祭典のために対馬まで足を運ぶ人は多くなく、さらに「巡礼」として毎年のイベントに訪れる人は本当に希少であった。活動資金が潤沢でなかったことから広報活動も規模が小さく、アートファンタジアを島内外に向けて大々的に宣伝し、活動を発信することが出来なかった。

ギンザ柳々舎は、3年間の事業を振り返り、現時点において対馬に現代芸術イベントを根付かせるには、システムの構築から人の動員まで対馬全体の協力が必要であり、そのためには、対馬市行政や手腕ある民間団体が積極的にアートファンタジアを誘致し、直島のケースのように10年以上の長期的な展望を持って活動を牽引し、支援していく必要があるとしている。対馬市行政は資金面のスポンサーではあったが、いわゆる実働部隊としての協力はあまりなかった。高齢化・過疎化の進む対馬が現状を脱するには、中央政府より支給される地方交付金の枠内で島内経済を維持するという従来型のやり方から脱却する必要があるという。行政や民間団体が積極的に自己変革を進め、積極的に島の外に出かけて行き、地域興しの様々な取り組みを視察しながら、新しい発想を求める姿勢が必要であるとギンザ柳々舎は言及する。

対馬市行政側にとっては、通常の芸術作品の展覧会とやり方の異なるアートファンタジアは、イベント全般の動きや成果が見えづらく、どこか判然としないものであった。特に予算の使途や事業の成果を明瞭に示すことが企画者側に求められた。結局、目に見える成果が得られなかったことから、アートファンタジアはギンザ柳々舎による対馬市委託事業としては3年間で終了した。2014年からは広島市立大学の伊藤氏に委託され、継続している。

それでもアートファンタジアの活動にボランティアとして、あるいは鑑賞する側として参加した対馬市の住民は、イベントの趣旨を理解し、現代芸術という新しい文化経験を驚きと感動で受け入れ、また対馬という場所を新たな眼差しで見直した。作家たちもまた、創作活動を通して対馬の自然や人間の営為、朝鮮通信使を含めた日韓関係、現代社会の在り様など様々なテーマについて個々に感性や思考を深めていった。前述の通り、2013年の観音寺仏像盗難事件が生じたことによりアートファンタジアの続行が危ぶまれた時も対馬島民のイベントに対する反対や抗議はなく、韓国からの作家が創作活動することに全く支障なかった。これは、島民のアートファンタジアに対する認知度や関心度が小さかったからとも言える。

しかし、作家と個々人の鑑賞者との間に作品を介してコミュニケーションが生まれ、あるいは作品のテーマに触れることによって鑑賞者が自分自身を内観し、自分を取り巻く世界について考え、何かしらの認識を得るきっかけとなったことも確かである。対馬を現代芸術の「巡礼地」に変えるという企画の成果は量的には小さかったが、継続していけば将来には質的な成果を得る可能性が感じられた。

結びにかえて

2013年の対馬アートファンタジアのオープニングセレモニーに出演する予定であった韓国伝統舞踊家の趙寿玉氏は、2014年11月8日に川越市で催される縁地連の「朝鮮通信使ゆかりのまち全国交流会」（これ以降、「全国交流会」と表記）に出演することになった。「全国交流会」は、多文化共生・国際交流をテーマに高麗神社宮司の記念公演と日韓の芸能舞台共演の「唐人揃いものがたり」で構成され、それに9日の朝鮮通信使、民族衣装、伝統芸能行列の「川越唐人揃い」が加わった。趙氏が出演するのは、8日の「唐人揃いものがたり」の部であった。「川越唐人揃い」は多文化共生・国際交流を趣旨に2005年より開催されているパレードで、1655年に川越の豪商が江戸で朝鮮通信使を見物した折、その様子を日記に書き残した記述から川越氷川祭礼で「唐人揃い」と呼ばれる朝鮮通信使の仮装行列が出されたことに因んでいる。

趙寿玉氏は、四・三事件の動乱を逃れて済州島から対馬に渡った両親の間に1955年に生まれた。中学生の時に下関に引っ越し、主に朝鮮半島南部出身の人々の住む地域で暮らした。趙氏は、いわゆる在日コリアン2世として括られる。その後1980年代に韓国へ留学し、人間国宝の李梅芳氏のもとで韓国伝統舞踊を修めた趙氏は、在日韓国人として初の「サルプリ舞」履修者となった。現在は、東京を拠点に韓国舞踊および民俗芸能の公演活動と教室指導を精力的に行っている。

ギンザ柳々舎の梁順喜氏からアートファンタジアのオープニングセレモニー出演の依頼を受け、梁氏たちと共に数十年ぶりに対馬を訪れた趙氏は、この世に生きている人も亡くなった人も含め、全ての出自の人々の苦を払い、魂を慰めるような舞を捧げたいと考えていた。趙氏にとって対馬は、懐かしく美しい故郷であり、家族とともに幼少期から少女期にかけて過ごした心の拠り所とも言うべき特別な場所であった。その対馬で舞うことは、趙氏の長年の悲願であった。

また同じ頃、趙氏は対馬市観光物産推進本部の阿比留正臣氏からも韓国舞踊の依頼を受けた。それは、厳原港祭りへの出演を含めた対馬での舞踊公演ではなく、縁地連が協催する川越市での「全国交流会」の舞台「唐人揃いものがたり」への出演であった。低予算にあって、阿比留氏は縁地連を代表する立場から対馬出身の趙氏に出演の協力を求めた。ところがその

「境界域」の人々の祭り

一方で、川越の実行委員会は釜山のチョン・シンヘ舞踊団と南山ノリマダンに出演を依頼し、韓国の代表的な舞踊と打楽器の芸能を披露してもらうこととなった。こうした主催者側のコミュニケーションの行き違いから、趙氏の出演は宙に浮いた形となった。その後2014年8月になってようやく趙氏はあらためて実行委員会より「唐人揃いものがたり」出演の依頼を受けた。すでに日韓双方の出演者が揃い、日韓文化交流の段取りが整っている中で、実行委員会が趙氏に要請したのは、関東大震災時に虐殺された朝鮮系住民の犠牲者の慰霊と、その時に川越市市役所と消防署が18人の朝鮮系と2人の中国系住民を匿って保護し、衣類などを与えたことを記念する舞であった。実行委員会は「唐人揃いものがたり」で釜山の舞踊団による韓国舞踊と趙氏の在日コリアンとしての鎮魂の舞を見せることで、川越市民が国際交流の伝統と他者に対し寛容な気風を持ち合わせてきたことを前面に表明しようとしていることが伺われる。

対馬における二つの祭り、厳原港祭りと対馬アートファンタジアを考察する時、今日私たちが生きるグローバル化社会が近代の秩序と制度の継承の上に成り立っており、それに代わるような新しいパラダイムが容易に到来しないことが実感される。厳原港祭りは、対馬の特色である日韓外交の伝統が継承され、地域の祭りでありながら日本の日韓交流を代表し牽引するものとして位置付けられる。祭りは日韓外交の影響を受け、緊張感を伴いながら両国の友好関係が確認される。その場に具現される文化的事象は、時代考証に忠実な、正真正銘の「韓国文化」や「日本文化」として提示され、そういう意味において、国民・国家の枠組みを前提として祭りが実施されていると考察される。

対馬アートファンタジアは、近代の枠組みを越えた個人が集う祭典をコンセプトとしている。実際の作品の制作や展示のあり方において、個々の作家が用いる材料はあくまで表現のためのツールであり、「韓国的なるもの」や「日本的なるもの」といった規格化されたエスニシティやナショナリティを打ち出すものはない。また、そこには国家間の対等な友好関係を確認する際に付随する危うさや緊張感といったものはない。しかし、アートファンタジアは朝鮮通信使の史実から発想を得ており、また企画者の個人的な背景や作家たちが主に韓国と日本の出身であったことから、日韓交流の要素がベースにあったことは否定できない。現実として日韓関係の行方に作家個人の立場が回収され、創作活動が左右されることは避け難いものであったように見受けられる。

そして趙寿玉氏は、故郷の対馬で一人の舞踊家として魂の舞を舞うことが叶わず、「唐人揃い」の舞台で在日コリアンを代表して日本の植民地主義を過去に流し去るための舞を舞うこととなった。この祭りにおいて、趙氏はその存在を日韓交流の枠外に置かれており、偶然にもそのことを象徴するかのよう「全国交流会」のチラシに趙氏の出演は記載されていない。同時に趙氏が舞う和解の舞は、祭りの主催者側の打ち出すいわゆる「未来志向」の日韓

交流を支援するものとして生かされる。このことは、個人が文化に対して自由な志向性や創造力を持ちながらも、近代史の中で成立し現代に継続する関係性や、国民・国家の概念および制度の縛りから自由でいることが難しく、知らず知らずのうちにその縛りの中で決められた文化と役割を担うことを要請されているように思われるのである。

参 考 資 料

I. 一次資料

1. インタビュー

阿比留正臣氏，2014年3月24日実施，於：対馬市観光物産推進本部。

田中節孝氏，2014年2月24日実施，於：鶴翼山西山寺。

趙寿玉氏，2014年2月24日，10月30日実施，於：趙寿玉チュムパン。

夫学柱氏，2014年2月6日実施，於：夫学柱建築設計事務所。

山本豊津氏，梁順喜氏，2014年2月4日実施，於：オフィスイーヨー。

山本博己氏，2014年3月24日実施，於：対馬市商工会議所。

2. 報告書

ギンザ柳々舎「アートファンタジア 業務報告書」，2011-2013年。

朝鮮通信使緑地連絡協議会『緑地連だより』，No. 15（2012年），No. 16（2013年）。

3. 報道

「朝鮮通信使行列，台風に泣く 対馬市，国書交換式のみ実施」，『西日本新聞』，2014年8月4日。

「平和の象徴 朝鮮通信使 日韓共同で記憶遺産に 民間や自治体呼び掛け 相互理解深めたい」，

『西日本新聞』（ウェブ版），2014年10月22日。

4. 広告

「朝鮮通信使ゆかりのまち全国交流会 in 川越」チラシ。

II. 二次資料

李善愛『海を越える 済州島の海女 海の資源をめぐる女のたたかい』，明石書店，2001年。

伊地知紀子『生活世界の創造と実践 韓国・済州島の生活誌から』，御茶の水書房，2000年。

上水流久彦「対馬の韓国交流 八重山・台湾と比較しつつ」，「対馬を往来した人々」，『対馬の交隣』，交隣舎出版企画，2014年。

小島武博「雨森芳洲の誠心交流」，『対馬の交隣』，交隣舎出版企画，2014年。

齋藤弘征「江戸時代の朝鮮通信使外交 朝鮮通信使と対馬」，『対馬の交隣』，交隣舎出版企画，2014年。

辛基秀『朝鮮通信使 人の往来，文化の交流』，明石書店，

鶴田啓『対馬からみた日朝関係』，山川出版社，2006年。

中村八重「観光から見た対馬観光」『対馬の交隣』，交隣舎出版企画，2014年。

松原一征「現代における韓国との交流の展開と課題」，『対馬の交隣』，交隣舎出版企画，2014年。

「境界域」の人々の祭り

村上和弘「朝鮮通信使行列と〈日韓〉交流」, 『対馬の交隣』, 『対馬の交隣』, 交隣舎出版企画, 2014年。

山口華代「江戸時代の倭館と朝鮮貿易」, 『対馬の交隣』, 交隣舎出版企画, 2014年。

* 本論稿は, 2013年度東京経済大学個人研究助成費(A)による研究成果です。